

津軽での3日目には、土岐 司氏が弘前市鬼沢地区に案内してくださいました。彼は現在、「世界自然遺産 白神山地」のツアー・ガイドの会社を経営しておられ、地元には詳しく、また、密着し、達人とも言うべき人物かもしれません。



鬼沢地区とは、今も昔も、日本海の港・鱒ヶ沢から岩木山山麓を東に廻り、城下町・弘前と結ぶ短絡ルートである弘前鱒ヶ沢線沿いの村落で、弘前の郊外になります。鬼沢には鬼を祀った「鬼神社」がありますが、扁額の「鬼」の文字には角がないのです。なぜなら、村人を助けた良い鬼だったからです。神社本殿の棟飾りに鬼がいます。

なぜか、この道沿いの岩木川流域の数多くの神社の鳥居に、しめ縄の代わりに鬼の像が飾ってあったり、祠に祀ってあったりします。全国でも津軽地方のここでしか見られません。赤鬼、青鬼が、可愛らしい呼び方で「鬼コ」と言われています。

流刑のキリシタンの居住地の記録はありませんが、研究者の考察には多説あります。その一つに鬼沢村が推測されています。もし、流刑のキリシタンが鱒ヶ沢の港に上陸したとすれば、この道を通って弘前に連行されたのではないのでしょうか。鬼神社では「鬼」は治水により村人を救った良い人、落ち武者、山伏、大陸から漂着した渡来人では？等の伝説が残っています。



鬼神社には、狛犬ならぬ、不思議な狛魚・鯛焼きのようなもの(左)があります。とても驚き、思わずイクスゥス<イエス キリスト 神の子 救い主>(右)を思い出しました。



また、「20世紀初頭、パリ外国宣教会のモンタグ司祭が津軽に、潜伏キリシタンを訪ねて旅した時、1603年版の『こんちりさんのりやく』というキリシタンにとって貴重な写本を磐城山々麓高田村の匿名の方から取得した」と知りました。そのファクシミリ版(上智大学切支丹文庫蔵)を見に行きました。磐城山も高田村も偽名でしょう。でも、流刑キリシタンの命脈があったのは確実です。そんなわけで鬼神社に行ってみよう！という思いに突き動かされました。

様々な思いを胸に、私は土岐氏に鬼沢村の鬼神社はじめ、鳥居の鬼コを数力所案内して頂きました。どこの鬼コも♪鬼のパンツは良いパンツ！強いぞ、強いぞ♪と歌いたくなるようなユーモラスで剽軽な表情の鬼コたちでした。土岐氏は土着の岩木山信仰、蝦夷との交流、弘前城の守護としての鬼門、昔話などから、「鬼」の話が生まれたのではないかと非常に現実的に話してくれました。また、白神山地の西目屋村に住む「マタギ」から、昔、山奥に鉾山があり、切支丹が働いていて、彼らの墓と言われる場所に案内されたことがあったそうです。

さて、鬼神社に対する狛魚がありました。本当に不思議です。臺には「昭和33年3月29日 藤田重次郎 80歳建之」と銘されています。この狛魚を見て、土岐氏は「これは尾頭付きの鯛だね。ご祝儀の引き出物みたいだ」と言われます。私もそうとしか思えませんでした。けれども、私には鬼沢村の義民(私が一揆の首謀者だと主張し、一人処刑された)・藤田民次郎(1792-1813)と、建之した人物とは何か関連があるのでは？と、謎の中に入っていきたくもなりました。